

報告 4 「相互研修型 FD の未来：国際連携・ICT 利用などを巡って」

飯 吉 透（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

松下先生、どうもありがとうございます。京都大学の飯吉です。よく飛行機に乗っていて、目的地に着くと客室乗務員に「ようこそ、関西国際空港へ」と言われ、「今まで一緒に乗ってきたのに、何でここで突然ウェルカムなのだ」と違和感を覚えることがあります。まさにそのような感じかもしれません。今ご紹介いただいたように、自分が受けた大学院教育も含めて、アメリカの高等教育に 20 年ほど身を置いていました。その間、外から日本に呼んでいた折に、日本の高等教育の状況をいろいろ見る機会もあり、また京大センターの活動も注視させていただいていましたが、この 1 月から「内」に身を置くことになりました。日本の「内」です。京都大学のセンターの「内」です。ただ、自分が貢献できるものとして、「外からの視点」をできるだけ失わないように心掛けていきたいと思っています。

（以下スライド併用）

1. ネットワークの大切さ

国際連携、ICT 利用などをめぐる観点からのコメントということですが、国際であっても ICT 利用であっても、教育の進展のための最大の原動力と言えるものは、「教えたい、学びたいという情熱」です。FD は上から、下から、横からと色々な方法がありますが、「情熱がなければ何も動かない」ということは原点であり、当たり前のことです。これをもう一度強調したいと思います。問題は、意欲はあちらこちらでローカルに燃えているのに、どうしても長く続かずに燃え尽きてしまうという点です。ネットワーク化がなぜ大事かというと、理想的にはこんな感じで、京都でも「大文字の送り火」のようなイベントがありますが、「燃えろ、燃えろ」という感じになれば一番いいと思います。（スライド No.2 参照）

これがネットワークの強みだと思いますが、何がネットワークされるべきかという点、「情熱のネットワーク」が僕は好きですが、これは個人のネットワークです。個々の教員の先生方のネットワーク、それから組織のネットワークがあります。ただ、個人にしても組織にしても、「知識と経験」がそれぞれあるわけですが、このネットワーク化がなかなかできない。このフォーラムもネットワークの一つで、人と人が集まり知識と経験を共有しています。その時々々の満足感がありますし、それは冊子として残りますが、それが終わると、また来年に向けてみんな頑張ろうということになって「知識と経験」が消えてしまうのです。バブル的な感じです。

僕が京大のセンターに招いていただいたのも、そういうことだと思うのですが、カーネギー財団にいた時に、10 年間ほど SOLT（Scholarship of Teaching and Learning）を推進する仕事を全米の大学を対象にやっていました。実は、相互型研修型 FD と SOLT には大変共通した理念や価値観、方法論があり、その中核となるのが「ネットワーク」です。（スライド No.3 参照）

#4

田中先生の基調講演の中でもありましたが、MOST を京大センターの酒井先生と田口先生が中心に進めていて、これも僕がカーネギー財団でやったことと非常に共通点があり、ツール自体も同じものを使っています。先ほどから「FD の成果の見える化」という話が出ていますが、まさに「見える化」をするための ICT を利用した支援ツール、ということです。

MOST はカーネギー財団でやったことよりもさらに進んでいる部分がありまして、例えばコミュニティーベースで、ナレッジ・シェアリングの場がつかれます。あと、これはプレ FD なども含んでいて、教員だけではなく、大学院生や職員の方も参加することができます。ここにも何人かフェローの先生方に来ていただいているのですが、「MOST

フェロープログラム」というものを始めました。全国の大学からやる気のある、頑張っている先生を募り、それぞれの先生がたにご自身に取り組まれている教育改善の試みをドキュメントしてもらおうという試みです。MOSTは現在、登録者が100校以上から435名、それからスナップショットという教育実践や教育改善がドキュメントされたものが約1200点あります。

カーネギー財団でやったときは、100カ国以上から3万5000人ほどの登録者がいて、スナップショット数は約14万点ありました。それ自体は良かったのですが、カーネギー財団でこの試みを終えなくてはならない状況になり、その時にどうしてもやりたかったことがありました。それは、「これだけ出てきたいわゆる『教育実践の知識と経験』を、必要な人たちにどうやって届けるか」ということです。教育実践や教育改善をまとめたスナップショットが取りあえず沢山作られたのは良かったのですが、そこから後が道半ばだったので、「是非それを日本発でやりたい、京大発で日本の皆さんを巻き込んでやりたい」という強い想いがあります。(スライドNo.4参照)

2. 教育の進化と自己成長可能なFD

僕の持論ですが、教育は進化し続かなければいけません。つまり、FDも自己成長できなければいけないということです。先ほど固定剤という話がありましたが、固定されてはいけません。われわれは「学生の学びの実質化」や「グローバル人材を育てる」という話をよくします。ところが、これと表裏一体として議論されなければならないのは、「教員の学びと教えの実質化」ということです。しかも、最近は「英語で授業しなければならない」という話も多く出ますが、そういう非常にミクロ的な視点だけではなく、「学生にグローバルに活躍できる人材になってもらうのであれば、教員自身がグローバル人材にならずに、そのような学生が育てられるのか」という議論があってもおかしくないのではないか、と思います。ただ学生に英語を教えてやれば、それでグローバルになって羽ばたいていく、というのはおかしい話です。

日本を見ていると、非常にいい面もたくさんあるのですが、多文化的な理解が欠けている部分があるのではないのでしょうか。この辺もこれから大学でどんどん先導していくべきだと思います。そのために考えるべきものが、三つあります。まず、コレクティビティーです。「集合性」と訳してもいいのかもしれませんが、文殊の知恵的なことです。それから、田中先生の話でもありましたが「多様性」。例えば、各大学・各部局の中でいろいろな教育的な問題やニーズが多様になってきている。学生の学びも多様化している。それらの問題に、どう対応していくかということです。また、そういうものを前提にして、「オープン性」というものがマストというか、必要条件ではないかと思います。オープンにしなければ、結局何も分かりません。先ほどの高橋先生のお話でも、「各部局でどうなっているのがつかみにくい」と言われていました。上から「オープンにせよ」というトップダウンのやり方もありますが、ボトムアップ的にどんどんオープンにしていけば、上からの仕事もやりやすくなるということもあります。これからFDを考えていくときに、これらの要素を自律的に包括できるような、より統合的・体系的でシステミックなものが必要だと思います。(スライドNo.5参照)

3. 大学教育イノベーション

コメントというか提言ですが、一つは、FDが他者から供与されている道具として固着している限り、教育改善の継続的・恒久的な進化は停滞します。ファンディングがその段階で終われば、そこで教育の進化も止まってしまうということです。加えて、所詮他者から与えられた道具だということであれば、それに対して文句も言えるわけです。ところがこれを自生的にやっていけば、それは道具としても自分のものになっていくので、もっとやる気も出てきます。

もう一つは、教育改善がFDの儀礼化と形式化を乗り越えていくべきだ、ということ。そのためには、今までのパネリストの方も言われていますが、大学・地域・国・学問分野を越えて、教員だけではなく教育支援専門スタッフやアドミニストレーター、学生が、レジユメには「立体的」と書かせていただきましたが、非常に多層的で重層的なネットワーク間で繋がっていないといけないのです。ですから、これらのネットワークのレイヤーが単に並行して存在すればいい、というものではありません。

センター内の人間としては、田中先生が最後の2〜3枚のスライドでお示しになりましたが、大学教育におけるイノベーションを中心的に進めていきたいと考えています。そこには、もちろん「学生の学びの実質化」という最大の

課題があります。教育的な創造・開発は、ローカルでいいものがたくさんありますが、これをリソース化・共有化していくことによって、教育イノベーションがローカルに出てきて、普段であれば消えてしまうものがグローバルに利用・再利用できるようになります。文科省でも言われていますが、こういう循環が非常に大事だと思うのです。このような試みに、我々は今後注力していきたいと考えています。京大のセンターだけではなく、日本中、世界中で展開していければ素晴らしいと思います。（スライド No. 6 参照）

4. まとめ

最後に、今後の課題として「惰性的なプロセスからの脱却、アリバイ的なものからの脱却」ということがあります。まず、「参加的な文化」をつくっていかなくてはなりません。それから、先ほど山田先生が「志は同じ」という話をされていたと思いますが、「志向性の共同体」をわれわれはつくっていけるのではないかと、ということです。特にこのフォーラムに集まっておられるような先生やスタッフの方々は、まさにこのような「志向性の共同体づくり」においてリーダーシップを取っていける人たちだと思います。それから、「実質」という言葉だけが先に歩いています。これをどうやって「見える化」して実証するかということです。ポートフォリオなどもどんどん積極的に活用しなければなりません。それから、まるでモチベーショントークのようですが、「新しいことに挑戦し続けること」です。アメリカの大学のアドミニストレーターに聞いても、「失敗を恐れない。私は1日に一つぐらい失敗することをみんなに奨励している」と言うのです。大学のアドミニストレーターがまずそういうことを率先して言うことによって、教育改善においてもリスクテイクがある程度進んでいき、その中でいいものが残っていくべきです。

あと田中先生が、センター長になられたからだとも思いますが、「どんどん苦しくなってきた、楽しくなくなってきた」と仰っておられましたが、このようなネットワークに参加する一人一人が、「楽しく前向きに教え続ける、学び続ける」ための工夫をしていかなくてはなりません。それから、自律性の問題ですが、先生一人ひとりが自ら問題を設定し、解決し、さらにそのプロセスや結果を発信し広く外に出していく、という姿勢が問われます。

最後に、もちろん自律的・自助的であることは大変大事ですが、それと同時に協調的・互助的でなければならない。このバランスを保っていくことは非常に難しいのですが、今の日本ならできる状況にあるのではないかと、ということです。（スライド No. 7 参照）

以上、ご清聴ありがとうございました（拍手）。

（松下） 飯吉先生からのコメントは、だいぶ内側の目が勝っていたかもしれませんね。既に出していただいた課題について、これから私たちのセンターが取り組もうとしている活動についても紹介していただきました。

最後に樋口室長より、お話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

相互研修型FDの未来

- 国際連携・ICT利用などを巡って -

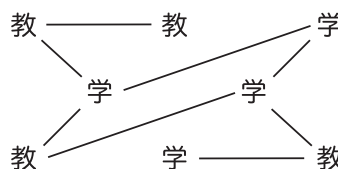
飯吉 透

京都大学 高等教育研究開発推進センター

第18回大学教育研究フォーラム 2012年3月15日

教育の進展のための最大の原動力

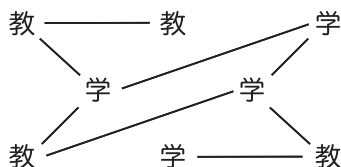
よりよく「教えたい」という情熱
「学びたい」



ネットワーク化されるべきもの

情熱 個人 組織 知識と経験

相互研修型FD と Scholarship of Teaching and Learning
に共通した理念・価値観・方法論



相互研修型FDとSOTL推進のためのオープンナレッジ

- 教育実践やFD活動を可視化・共有化・Peer ReviewするためのオンラインFD支援環境
- コミュニティ・ベース
- ギャラリーなどを通じて、効果的な教育実践事例を共有・蓄積
- 学内外の大学教職員や大学院生（ブレFD）を対象
- MOSTフェロープログラム開始（第1期10名）
- 登録者435名（100校以上から）
- スナップショット数1,200以上

<http://most-keep.jp>



進化し続ける教育を支える自己成長可能なFDの模索

- 学生の「学び」の実質化
- 学生のグローバル人材としての成長



- 教員の「学び」と「教え」の実質化
- 教員のグローバル人材としての成長

共同性 Collectivity 多様性 Diversity オープン性 Openness

多文化的理解 (Multi-Cultural Understanding)

これらを自律的に包括できるような、より統合的 (integrative)・体系的 (systemic) なFDが必要

次世代FDモデルづくりに向けた提言

- FDが、「他者から供与される道具」として固着すれば、教育改善の継続的・恒久的な進化は停滞する。
- 「FDの儀礼化と形式化」を乗り越え、「共同で、多様に、オープンに」教育を進化させ続けられる仕組みが必要。
- そのためには、相互研修型FDや Scholarship of Teaching and Learning (SOTL) のようなネットワーク形成に、大学・地域・国・学問分野を越えて、教員・教育支援専門スタッフ・アドミニストレーター・学生が積極的に参加していかなければならない。

京都大学高等教育研究開発推進センターのNext Step :

「大学教育イノベーションの組織化を目指し、『創造・開発』『リソース化・共有』『利用・再利用』の循環に基づいた教育改善の持続と促進を図る」

今後の課題（「惰性的なプロセス」からの脱却）

- 「参加的文化」（Participatory Culture）の醸成
- 「志向性の共同体」の育成
- 「実質」をどう実証するか？（ポートフォリオ等の積極的利用による学びと教えの「見える化」の推進）
- 新しいことに挑戦し続ける（失敗を恐れない咎めない）
- より楽しく前向きに学び続け、教え続ける工夫
- 「自ら探求・問題解決し、そのプロセスや結果を発信しながら、自分のグローバルネットワークを国内外に広げられる」個人と組織づくり
- 自立的・自助的であると同時に協調的・互助的でもあることを目指す